

ガザーリー 1985『哲学者の意図——イスラーム哲学の基礎概念』（イスラーム古典叢書）（黒田壽郎訳・解説）岩波書店。

—— 2003『誤りから救うもの——中世イスラーム知識人の自伝』（中村廣治郎訳注）ちくま学芸文庫。

—— 2013『中庸の神学——中世イスラームの神学・哲学・神秘主義』（東洋文庫 844）（中村廣治郎訳注）平凡社。

中村廣治郎 2002『イスラームの宗教思想——ガザーリーとその周辺』岩波書店。

（加藤 瑞絵 清泉女子大学文学部非常勤講師）

**辻明日香『コプト聖人伝にみる十四世紀エジプト社会』（山川歴史モノグラフ 32） 山川出版社 2016 年
196＋63 頁**

本書は、コプト教会に伝わる聖人伝を基に、13 世紀後半から 15 世紀初頭までを含む「長い 14 世紀」のエジプト社会を描き出すことを試みた労作である。

この 14 世紀とは、マムルーク朝政権の反ズィンミー政策によりコプトの教会や修道院が破壊され、イスラームへの改宗が進んだ結果、コプトの人口比率が 1 割ほどに減少した時期とされている。また、14 世紀とは、コプト教会で歴史叙述などの文学活動がほぼ途絶えた時期とされているが、一方で、同教会は同時期に活躍した隠修士や修道士の生涯を聖人伝という形で独立した文学として編纂するようになった。このような背景を踏まえた上で、このころ編纂されたコプト聖人伝を通して、当時のコプトをめぐる社会状況およびその変化を浮かび上がらせようというのが、本書全体のねらいである。

以下に、本書の目次と概要を示す。

序章 コプト聖人伝研究の意義

第 I 部 下エジプトにおける聖人の活動 13～14 世紀初頭

第 1 章『ハディード伝』の世界 下エジプトの司祭

第 2 章『ユハンナー・アッラッバーン伝』の世界 下エジプトのキリスト教社会

第 II 部 カイロとその周辺における聖人の活動 14 世紀

第 3 章『バルスーマー伝』の世界 隠修士としての聖人

第 4 章『アラム伝』の世界 「聖なる狂者」とは何か

第 5 章『ルワイス伝』の世界 迫害下の聖人

第 III 部 上エジプトにおける聖人の活動 14 世紀後半

第 6 章『ムルクス・アルアントゥーニー伝』の世界 修道院における暮らし

第 7 章『イブラーヒーム・アルファーニー伝』の世界 ある修道士の生涯

終章 聖人伝に描かれたエジプト社会

序章では、エジプトにおけるイスラーム期のムスリム・キリスト教徒関係の先行研究、13 世紀までのコプトの略史、アラビア語によるコプト聖人伝史料についての概要が紹介される。

次に第 I 部の第 1 章と第 2 章では、13 世紀から 14 世紀初頭を生きたハディードおよびユハンナー・アッラッバーンの聖人伝を基に、当時の下エジプトのコプト教会における聖人崇敬の状況と、当時のコプトの人々が経験した重税、教会破壊、飢饉と疫病などの状況が分析される。また、ユハンナー伝に記された地名から、当時のデルタ地方におけるキリスト教徒の勢力範囲の変化が検討される。

第 3 章では、コプトの聖人であるバルスーマーが、ムスリムの聖者と同様に政府と一般の人々の間の仲介者としての役割を果たしていたことが指摘される。またバルスーマーの崇敬者にはムスリムも相当数含まれていたこと、そしてそれが同聖人伝に記載されたことは、他の宗教に対するコプト教会の優越性を主張する意図があったであろうことが指摘される。

第4章では、カイロ郊外のシュブラーで活動した聖人アラムが、ナイル川や水の制御に関する奇蹟を起こす能力を持っていたとされることが指摘され、14世紀前半に廃止された「殉教者の祭り」との関連が検討される。この祭りは、シュブラーの教会に保管されていたコプトの殉教者の指をナイル川に投げ入れることによりナイル川の満水を祈願する祭りであったが、それがスルターンの命により廃止された後はシュブラーで活躍した聖人アラムにその役割が求められたということが指摘される。

第5章では、同じくカイロを拠点としたルワイスの聖人伝に登場するコプトの官僚の姿を通して、キリスト教にとどまったまま出仕する官僚や、一旦イスラームに改宗した後に再改宗を試みる官僚の存在が明らかにされ、通説となっているマクリーズィーの1354年コプト大量改宗説は多分に誇張を含んだものであることが指摘される。

第6章では、紅海の聖アントニウス修道院の修道士であったムルクスの聖人伝で言及される参詣者に関する情報を通して、同修道院がイスラームに改宗した者や再改宗を希望する者を受け入れる避難先となっていたことが明らかにされる。加えて、改宗したはずの元コプト官僚は寄進などによってコプト教会と関係を維持していたことが明らかにされ、また教会側もそうした改宗者や再改宗希望者を受け入れ、かつ信徒の殉教を回避させようとする態度を示していたことが指摘される。

第7章では、上エジプト出身で、最終的にカイロで活動した修道士イブラーヒームの聖人伝で言及される歴史上の出来事を分析し、15世紀初頭のカイロおよびその周辺では、殉教や再改宗といった問題は既に下火になっており、むしろティムールの進軍やオスマン朝の勢力拡大などの政治情勢に関心が移っていたことが指摘される。

終章では、全体の総括として、聖人の崇敬がおよんだ地域的範囲の記録、ナイル川の制御能力の維持、ムスリム聖者への対抗など各聖人伝が書かれた意図が分析され、聖人伝から明らかになった長い14世紀のコプト社会を取り巻く状況とその変化を振り返る。

聖人伝を史料として用いていることから、本書は、M・ミーハーイールによる5～11世紀のコプト史、M・シェノーダーによるファティマ朝期のコプト史、T・エルライスィーによるマムルーク朝期のコプト史、F・アルマニオスによるオスマン朝期のコプト史などのような、コプト教会側の歴史資料を用いた一連のコプト史研究の中に位置付けることができる。本書も含めて、これらの研究はいずれも2000年代以降に発表されており、それまで歴史資料としては軽視されてきたコプト教会に伝わる聖人伝や神学書などを用いて、コプトから見た歴史を描こうとする点で、「新しいコプト史」とでも名付けることができるだろう。

この「新しいコプト史」の文脈からいえば、聖人伝をコプトの歴史をみる窓として使うこと自体は新しい手法ではないかもしれないが、校訂本や目録が整備されていない中で、これらの聖人伝を世界各地の図書館や修道院から蒐集し分析したことは、マムルーク朝期のコプト史研究への重要な貢献と言えるだろう。これら7点の聖人伝が描き出す14世紀のコプト社会は、リアリティに満ち、色鮮やかである。また、本書で用いられた聖人伝には、下エジプトや上エジプトを舞台としたものが含まれており、カイロのみならず地方の状況を伝えている。さらに、官僚などのエリートのみならず、市井の人々の動向や、一部では女性たちの様子も拾い上げられている。

著者は序章で、「従来研究されてきた、十四世紀におけるムスリム・キリスト教徒関係の悪化の要因やその結果だけでなく、この時代におけるコプト教会の生存戦略を検討することは、(中略)ムスリムと異教徒との多層的かつ可変的な交渉史を描き出すことを可能にする」(p.5)と述べている。つまり、14世紀のムスリム・キリスト教徒関係の悪化という社会背景がある中で、そうした関係悪化に焦点を当てた先行研究に欠けている、両者の間の「交渉史」という視点を、聖人伝の研究を通して提示しようというのである。おそらくこれが著者の問題意識の核であり、本書が全体を通して示した最も重要な事柄であるといえるだろう。

以上のように、本書は「新しいコプト史」研究、より広くとればエジプトの中世史研究に重要な貢献を行った業績であると言えるが、以下、いくつか気になった点を挙げていきたい。

第一に、本書では「長い14世紀」のコプトをめぐる社会状況や、それに関する先行研究、通説などが最初にまとまった形で提示されておらず、そうした情報は各章の関連する箇所でごく手短かに小出しに提示される

にとどまっている。そのため、聖人伝を通して明らかになった事柄にどのような意味があるのか、どう解釈するのが適当なのか判断に苦しむ部分が見られた。このような時代背景や社会情勢に関する情報は最初に提示しておくべきであるし、先行研究や通説については、内容を紹介するのみならず、著者のそれらに対する態度を明らかにし、検討すべき事柄があるなら本書のどの部分で検討を加えるのか、あらかじめ示しておくべきであろう。

第二に、本書で取り上げられたアラビア語によるコプト聖人伝は、随所で古代末期の聖人伝やビザンツなど他の教会の聖人伝と比較対照されており、そうしたキリスト教の聖人伝の文学的伝統の中にこれらのコプト聖人伝を位置づける試みが行われている。その試み自体は示唆に富むものであり、今後の研究の進展が期待される部分であるが、その一方で、イスラーム期以降のコプト教会で重要視され、それがゆえに研究の蓄積がある殉教者伝と、一連の14世紀のコプト聖人伝との関係がほとんど検討されていないのはなぜなのか疑問に思った。コプトの聖人伝および殉教者伝が書かれた目的や時代背景の比較、拷問に耐えて生き延びた聖人と殉教者の役割の重なりと相違点などの点について、殉教者伝と比較して論じていれば、一連の聖人伝をより立体的に位置づけられたのではないかと思われる。

第三に、同時代のムスリムの聖者崇敬との関係については、ムスリム聖者とコプト聖人の類似性や両者の対抗関係などについていくつかの箇所ですら簡単に言及されているが、深く詳細にわたった議論が展開されていないため、物足りなく感じた。ムスリム・キリスト教徒の間の交渉史を描くために、聖人伝を史料として用いたのであれば、そこから一歩踏み込んだ議論がなされてもよかったのではないか。また、この点に限らず、本書は全体が聖人伝ごとの章立てになっているため、各聖人伝に関連する論点が各章末で提示されるのみで、それぞれが深く掘り下げられていないことについてもやや物足りなさを感じた。

最後に、コプトの紹介の部分で気になった点をいくつか挙げていきたい。まず、コプトという名称が他称で、自称はオルトドクスであるという指摘(p. 14)であるが、少なくとも18世紀後半以降、コプトという名称は自称として使用されているので、このような指摘をするのであれば時代を限定する必要があるだろう。また、自称とは名乗る相手や場面によって変わるものであり、一つではない場合が多い。この「オルトドクス」という名称がどういう場面で使用されていたのか、他称である「コプト」という語が当人たちにとってどういう響きを持つ語であったのか、可能であれば当時の文脈に沿って説明したほうが良いように思えるし、また著者が敢えて当時は他称であった「コプト」を用いる理由も提示した方が良かったのではないだろうか。

また、コプト教会の信徒が「エジプトの人口の10%以上を占める」(p. 5)としているが、これが現代のエジプトについての数字であるならば、再検討が必要である。この10%という数字は、ジャーナリストや研究者の間でよく用いられるため独り歩きしている感があるが、元の出所はChithamによる推計値である。Chitham [1986: 24–36] は、コプトの人口比に関する17–19世紀の推計値および19世紀末以降の統計資料を比較検討した上で、1976年のエジプト政府の統計による6.3%という数字は、キリスト教徒(コプト正教以外も含む)がエジプトの総人口に占める割合として信頼できる最小値であり、何らかの理由でキリスト教徒の人口が正しく計測されていない可能性を考慮しても、10%が最大値であろうと結論付けた。この10%という推計値については、その後、Elsasser [2014: 7] が実は根拠がないと指摘しており、現在はコプトの人口比を政府統計に近い6%前後とするのが妥当であろうと考えられるようになっている。

また、凡例に記載されているコプト暦の月名のカタカナ表記のうち、第4月のキーハクはキヤフク、第13月のナースイーはナスイーではないかと思われる。また、アブー・ミーナー修道院／教会(p. 107, 109)とあるのは、マール・ミーナー修道院／教会であろう。

以上、些末な点を指摘したが、本書は全体として、これまで歴史資料として用いられてこなかったアラビア語のコプト聖人伝を用いて「長い14世紀」のエジプト社会を描き出すことに成功している。本書のように、コプトあるいはマイノリティ側の史資料を用い、彼らの視点を重視した研究は国際的にみて主流になりつつあり、今後さらに研究の蓄積がなされることが期待される。

<参考文献>

Chitham, E. J. 1986. *The Coptic Community in Egypt: Spatial and Social Change*. Durham: Centre for Middle Eastern and Islamic Studies, University of Durham.

Elsasser, S. 2014. *The Coptic Question in the Mubarak Era*. Oxford: Oxford University Press.

(三代川 寛子 オックスフォード大学学際的地域研究学院訪問研究員、
上智大学アジア文化研究所客員所員)

私市正年・浜中新吾・横田貴之(編著)『中東・イスラーム研究概説——政治学・経済学・社会学・地域研究の
テーマと理論』明石書店 2017年 390頁

本書は、冒頭の「はじめに」で述べられているように、人間文化研究機構(NIHU)による「イスラーム地域研究」プログラムの研究グループ「イスラーム運動と社会運動・民衆運動」(上智大学)が、2006年度から2015年度までの10年間におこなった共同研究の成果をもとにしたものである。「イスラーム地域研究」プログラムは、早稲田大学、東京大学、上智大学、京都大学、東洋文庫の国内5拠点を結ぶネットワーク型の研究プロジェクトであり、このうち現代の中東・イスラーム地域に関する研究を牽引したのは、とくに上智大学と京都大学であった。上智大学拠点の代表研究者を務めた私市正年氏が編者となり、同プロジェクトへの参加者を中心に執筆された同書は、我が国における現代を対象とした中東・イスラーム研究の到達点を示す一冊と言えよう。2000年代以降に出版された中東・イスラーム研究に関する概説書としては、小杉泰・林佳世子・東長靖(編)『イスラーム世界研究マニュアル』(名古屋大学出版会、2008年)や、2003年から2005年にかけて東京大学出版会より刊行された全8巻から成る『イスラーム地域研究叢書』シリーズが挙げられる。本書は、『イスラーム世界研究マニュアル』と比べた場合、より現代を対象としたものであり、また『イスラーム地域研究叢書』シリーズと比べると、地域研究の手法と社会科学的手法の架橋という観点をとりわけ意識しながら書かれている点にその特徴が認められる。

地域研究と、政治学や経済学のような既に方法論的・理論的蓄積がある社会科学研究との間に、少なからぬ断絶が存在してきたことは、これまでも繰り返し指摘されてきたところである。なかでも、中東地域は長らく社会科学の分析手法によっては説明されにくく、またそれゆえに社会科学の理論化へと資することの少ない地域であるとみなされてきた。しかし、近年では、こうした中東地域を特殊視する見方——いわゆる「中東例外論」——を問題視し、社会科学の手法をもって中東地域を分析しようとする研究や、逆に中東地域の事例から社会科学への理論的貢献を図らんとする意欲的な研究がおこなわれるようになっていく。本書も、「地域を内側から詳細に知ろうとする地域研究の手法と、事実を一般的な枠組みで理解する理論的な分析手法の結合」(3頁)をその目的に掲げて編まれたものであると言明されている。執筆者には若手研究者や中堅研究者が多数加わっており、国内外の最新の研究成果が盛り込まれた本書は、我が国における中東・イスラーム研究の最前線を知ることができる格好の書である。各章の末尾にはそれぞれの章のテーマ、あるいは国々を学ぶうえでの必読の文献リストが付されていることも親切である。

*

本書は、5部42章から構成される。第Ⅰ部「政治的アプローチ」、第Ⅱ部「経済的アプローチ」、第Ⅲ部「社会的アプローチ」には、とくに政治学や経済学に関連するテーマが各部6章ずつ取り上げられて論じられている。第Ⅳ部「歴史的・思想的アプローチ」には、ナショナリズム論やパレスチナ問題といった、先行研究においても既に相当程度の蓄積があるテーマから、イスラーム急進派の問題といった比較的近年話題となっている新しいテーマまで幅広い内容が取り上げられている。以上の第Ⅰ部から第Ⅳ部までが、特定のテーマを取り上げた内容であるのに対して、第Ⅴ部「地域事情と研究課題」は、エジプトやヨルダン、レバノン、湾岸諸国といった中東の国々／地域に関する16の章が収録されている。以下、各部の詳細を見ていきたい。

第Ⅰ部「政治的アプローチ」には、「第1章 国家建設と崩壊国家の理論」(浜中新吾)、「第2章 イスラームとデモクラシーをめぐる議論」(末近浩太)、「第3章 権威主義体制の理論」(石黒大岳)、「第4章 君主制の比較と理論」(吉川卓郎)、「第5章 政治過程論(選挙と議会制度)」(荒井康一)、「第6章 中東研究と国際政治の理論」(溝渕正季)と題された6つの章が収められている。必ずしも政治学全般を網羅する内容ではないが、とくに中東・イスラーム地域が論じられる際に、最も取り上げられることが多いテーマが選ばれ